Guus Koenraads

Nico Schulte

Christiaan Zwanikken

Sander Doerbecker

Paul Panhuysen

Felix Hess

Soichi Arichi +
Takashi Sasaoka

Mihoko Kosugi +
Yasuhiko Ando

Tokihiro Sato

Goji Hamada

Hideharu Matsueda

Kazue Mizushima

港区政50周年記念事業　日本・オランダ現代美術交流展 1995 - 1996

根の回復として用意された12の環境

会場 旧赤坂小学校

Twelve Environments

1996. 6/9～6/23

Introduction

開催にあたって

私たち「ICAEE 国際現代美術交流展実行委員会」は、ここに、オランダ、アイントホーヘン市の「ヘット・アポロハウス」と共同で、日本・オランダ現代美術交流展『根の回復として用意された12の環境』展を開催致します。

今回のこの交流展は、95年のオランダ展と96年の日本展が対になっており、どちらも、テクノロジー・アートに代表される最先端の分野で活躍中の、日本・オランダ計12組のアーティストによる展覧会です。

昨年10月から12月にかけて開催されたオランダ展『NowHere』は、芸術の不在性と可能性をテーマに、アイントホーヘン市の旧織物工場を展覧会場として開催されました。両国のアーティストは、現地制作によるインスタレーション、パフォーマンス公演、シンポジウム開催など、精力的な活動を行い、「いま、この場から芸術が生まれる」といった現代芸術の刺戟に満ちた場の構築を実現しました。こうした試みは、《芸術の現在》を問うものとして、幸運にも各方面から高い評価を得ました。

半年を経ての今回の日本展では、この旧赤坂小学校を会場として、「知覚する身体とは何か」という共通のテーマを基に、参加アーティストが、人とテクノロジーの様々な関係を再び問い直します。

児童たちの歓喜が消えて久しい学舎が、テクノロジーを介した12の多彩な作品空間＝《環境》へと変容します。その中で、観客は、視覚と聴覚に対する《戯れ》と《偶然》に満ちた、共在的で相互浸透的な作品に出会うでしょう。

この展覧会は、テクノロジーから生命感覚の再発見へと向かう縦糸に、東西の交流という横糸を結ぶことによって、私たちの『根の回復』への一歩を提言するものです。

最後に、この展覧会実現にあたり、御支援、御協力いただいた港区、港区国際交流協会、及び、両国の関係各機関、皆様方に心より御礼申し上げます。

ICAEE 国際現代美術交流展実行委員会
代表 酒井 信一

交流展によせて

私は、1980年に設立された、オランダのアイントホーヘン市にある非営利の芸術家のための空間「ヘット・アポロハウス」のディレクターを努めています。

アポロハウスは世界各国の芸術家を招き、展覧会、インスタレーション、パフォーマンス、レクチャー、コンサートといった様々なスタイルで作品を紹介するほか、カタログ、論文といった印刷物や、レコード、ＣＤ、カセットテープなどの制作も手掛けています。また、内外の芸術機関との交流や共同企画も定期的に行い、これらの活動を通じて、アーティスト、キュレーターを中心とした人々とのネットワークを形成してきました。それは、お互いの意見交換や討議、芸術上の経験の共有を通じ、文化や社会における人間の価値、個の存在の尊厳を表明する、自立した人々の国際的なネットワークです。

ICAEE代表の酒井信一氏との最初のコラボレーションは1992年に始まりました。その年にアポロハウスは、酒井氏とフランス人アーティスト、クリストフ・シャルル氏の共同企画による『巨大都市の原生／東京ー大阪行為芸術　1992年ヨーロッパ・ツアー』を招きました。それは、日本のパフォーマンス・アーティスト21名がベルリン、ゲント、アイントホーヘン、ニースの4都市を巡回公演するもので、この企画が、今回の「日本・オランダ現代美術交流展」の直接の契機となっています。まず、私たちはテーマにそって集めた自国のアーティストの資料を交換して、互いに相手国のアーティスト6名を選出しました。選ばれた12組のアーティストの作品は、『NowHere』『12の環境』と題した、オランダと日本の展覧会で提示されます。この展覧会は、両国のアーティストの制作意図や背景について、アーティスト同士、あるいは、観客との意見交換や相互理解のための場となります。

この交流のテーマである『根の回復』は、両国のアーティストや観客相互に、お互いの差異や共通の立場に対する意識の高揚と、文化や芸術の固有性に対するより深い理解を促し、新たな芸術の統合へ向けた可能性に貢献するでしょう。

ヘット・アポロハウス
ディレクター　パウル・パンハウゼン

Foreword

ご挨拶

港区は1997年3月に50周年を迎えます。港区が誕生してから半世紀という大きな道標への到達です。

この間、激動の歳月でしたが「やわらかな生活都心——住みつづけられるまち・港区——」をめざして区民とともに歩んでまいりました。

このたびの交流展は、港区政50周年を記念して21世紀にむけて現代美術の最前線で活躍する日本とオランダのアーティストがつどい開催するものです。

会場の旧赤坂小学校は、再び文化の発信基地として創造の熱気と国際交流の舞台となって輝いております。

ご来場の皆様には、作品の鑑賞はもとより、公開制作、シンポジウム、パフォーマンス公演を心ゆくまでお楽しみいただきたいと存じます。

そして、新たな文化の創造や人びとの豊かなふれあいが育まれることを期待しております。

本展の開催にあたりましては、多くの皆様のご理解とご協力をいただきました。ここに心から深く感謝を申し上げます。

1996年 6月

港区長 菅谷 眞一

ご挨拶

日本とは400年も続いている永いお友達の国。
古くはオランダ医学、西洋とのかけ橋であった出島と日本に新しい知識を伝えてくれた国です。

港区とは芝公園の高台にあるオランダ大使館と100年以上のお付き合いです。

フィリップス、フォッカー、シェル等で有名な近代国家。

チューリップ、風車、運河などが目に浮かびます。

そして日本の浮世絵を愛してくれたゴッホ。私たちもゴッホの絵にひかれ、先日のゴッホ展も美術館で時間をひきのばすほど多くの人々が訪れました。

そのオランダから6人の芸術家を招いて、日本の作家と同じ会場で制作、展示する現代美術の交流を企画しました。

なつかしい旧赤坂小学校の校舎を臨時の美術館として両国のアーティストが競演します。

ご期待ください。皆様の御来場をお待ちします。

1996年 6月

港区国際交流協会

会長 兼高 かおる

日本・オランダ現代美術交流展によせて

今年もまた桜が咲き競い、いまや春爛漫です。この春風が東京の旧赤坂小学校に、現代美術交流展「根の回復として用意された12の環境」の開催をもたらしたことは、誠に慶ばしいかぎりです。

この展覧会は、日本とオランダ12組のアーティストの協調と努力の賜物です。ICAEE国際現代美術交流展実行委員会とオランダ、アイントホーヘンのアポロハウスとの協力によるこの展覧会は、日蘭文化交流のすばらしい一例として、両国の芸術愛好者にとって興味深いものとなるでしょう。(オランダ展は、昨年秋にアイントホーヘンで開催されました。)

西暦2000年には、日本とオランダの交流は400周年を迎えます。この来るべき歴史的な節目に鑑みて、両国の協力や交流が、これから先の数年間、さらに発展することを願い、期待しております。そうした交流は、両国の過去と未来を照らし出す文化的な顕現の、卓越した場にほかなりません。時宜を得た貢献であるこの展覧会は、両国の未来の交流に向けて最も歓迎されるものとなるでしょう。

私は、この魅力的な展覧会を実現したICAEEとアポロハウスを推奨するとともに、この催しをより多くの方々が楽しまれますよう願っています。

1996年 4月

駐日オランダ大使

F・P・ロバート・ファン ナウハウス

Twelve Environments

《企画趣旨》── 根の回復に向けて

加速度的に進化する高度情報ネットワークは、われわれの《知覚》と《感覚》を拡大し、自由なコミュニケーションを仮構した。しかし、その、あまりにも高速度で、デジタル的なコミュニケーションは、われわれの《知覚》を統御し、《感覚》の細分化の果てに、個としてのわれわれを「根なし草」にしてしまう危険性もはらんでいる。電子機器がもたらすこのような二律背反状況に対し、われわれの《身体》は、戸惑いを感じてはいまいか。認識し、知覚するこの《身体》とは何であるのかを、今、新たな可能性に向けて問い直さなければならない。

日本とオランダの作家たち、テクノロジー・アート、サウンド・インスタレーション、パフォーマンス、写真表現といった最前線の分野で活躍中の12名がここに集まる。彼らの作品は、時には、センサーを備えた極小のロボット群であり、秘めやかな光の乱舞する構築物であり、また、コンピューター制御が可能にする、機械と人のインターフェイス空間であったりする。未知の光彩と音響を用いての、既成の美術館的空間では体験不能であったような、視覚と聴覚に対する、共存的な、または相互浸透的な刺激。そしてまた、観客＝聴衆が機器に触れることによって生じる、作品空間と観客＝聴衆との融合。きわめて淡く、微かで、アナログ的に生成する音や光のなかで、観客←→作品、人間←→機械、主体←→環境といった二項対立は脱構築され、《身体感覚》が甦ってゆくだろう。作品の不思議な親和力、それは、何よりも、進歩と発展の一点に向けて純化の系譜を形作ってきたわれわれの歴史とは逆に、およそ《効用》とは正反対の、《偶然》を排除しない、いわば《戯れ》に満ちた空間が実現される点にある。

この展覧会は、現代社会のアイロニカルな状況、「人と自然」「開発と破壊」「発展と後退」などに対して、一元的な異義申し立てを試みるものではない。あくまで静謐に、それらの境界線上に、揺らぎと流動を呼び覚ますこと、日本とオランダの作家が持ちうる技術と身体のすべてを駆使して、対峙する狭間に虹のグラデーションを掛けること。他ならぬ大地に根差しているわれわれの《身体感覚》は、そこで、「根の回復」へ向けての一歩を踏み出すことになる。

イベント・プログラム

●展覧会
6月9日(日)～6月23日(日)　11:00～19:00

●制作公開／ワークショップ
6月3日(月)　13:00～18:00

●アーティスト・シンポジウム
6月15日(土)　14:00～17:30

●パフォーマンス公演
6月16日(日)
水嶋一江、篠原知花、新林和明「ストリングラフィ」　14:00～
パウル・パンハウゼン　インスタレーション＆パフォーマンス　15:30～
6月23日(日)
クリストフ・シャルル「UNDIRECTION (方向性無し)」　14:00～
浜田 剛爾「チープ・メディア・チップス」　15:30～

ペーター・B.カールス写真展
ヘット・アポロハウス資料展

オープニングレセプション
6月9日(日) 18:00～20:30
オープニング・パフォーマンス　パウル・パンハウゼン「A Good Match」

[参加アーティスト]
日本／有地左右一＋笹岡敬、小杉美穂子＋安藤泰彦、佐藤時啓、浜田剛爾、松枝秀晴、水嶋一江
オランダ／クリスチャン・ズワニッケン、サンダー・ドゥーベッカー、ニコ・シュルト、フース・クーンアラーツ、パウル・パンハウゼン、フェリックス・ヘス

アーティスト・シンポジウム
「根の回復に向けて－外在する芸術／内在する芸術」

このシンポジウムは、アーティストと観客が対話するひとつの場面として開かれます。
このシンポジウムでは、何らかの結論を求めることを特に目的とはせず、展示作品を中心に作品制作や鑑賞といった、芸術的体験の中で生じる様々な思惑、たち現れる矛盾や問題をあらためてとらえ直し、まさに現代社会の映し鏡としてそこにかいま見られる、私たちの置かれた環境を浮き彫りにしようという試みです。そして、それに如何に立ち向かうかをアーティストと観客の対話の中で探ってゆきます。

[パネラー]　安藤泰彦、小杉美穂子、笹岡敬、千崎千恵夫、浜田剛爾、水嶋一江、保科豊巳、パウル・パンハウゼン、フェリックス・ヘス
[司　会]　天野豊久

問い合わせ先
■旧赤坂小学校
東京都港区赤坂4-1-26
TEL03-3589-1182
■ICAEE 国際現代美術交流展実行委員会
ギャラリー・サージ
〒101 千代田区岩本町2-7-13 渡辺ビル1F
TEL 03-3861-2581 FAX 03-3861-2582

旧赤坂小学校

《ICAEE国際現代美術交流展実行委員会/ギャラリー・サージ》

ギャラリー・サージは、1989年に観客とアーティストのコミュニケーションや作品発表の場として開廊しました。これまでに、個展やグループ展といった画廊内での活動はもとより、大谷地下美術展など、アーティストによる自主企画展にも積極的に参加してきました。91年には、芸術家、評論家、学芸員、美術関係者からなる非営利の団体「ICAEE国際現代美術交流展実行委員会」を組織し、日本とベルギーの現代美術交流展を実現しました。同団体は、アーティストの紹介や国際交流を通じ、様々なアイデアの実現を図っています。

主な活動

1991年 日本・ベルギー現代美術交流展「浅草へ/Orientation50° Nord」 東京/ブリッセル
1992年 巨大都市の原生「東京ー大阪行為芸術 1992年 ヨーロッパ・ツアー」
ドイツ、オランダ、ベルギー、フランスのヨーロッパ4ヶ国を巡回公演
1993年「日本・パリ文化祭」実験的コラボレーション「東京エクスペリメンタル・アート・アンサンブル」を結成し、パリ・ユネスコで発表
1995年 日本・オランダ現代美術交流展「NowHere」オランダ・アイントホーヘン
日仏現代美術交流「開かれた扉・日本」パリ・パスティーユ　企画参加
1996年 日本・オランダ現代美術交流展「根の回復として用意された12の環境」東京
日仏現代美術交流「共鳴する場へ/Without Identity,Without Frontier」
京都　企画参加

ICAEE国際現代美術交流展実行委員会　代表 酒井 信一
ギャラリー・サージ
〒101東京都千代田区岩本町2-7-13渡辺ビル1F　TEL.03-3861-2581 FAX.03-3861-2582

《ヘット・アポロハウス》

アポロハウスは、1980年にオランダ、アイントホーヘン市に設立されて以来、世界各国の芸術家や作品の紹介に努めています。なかでも、実験性に富んだマルチメディア、パフォーマンスといった先駆的な活動は、ヨーロッパにおけるアポロハウスの存在を際立たせています。また、継続的に実施されるアーティスト・イン・レジデンスでは、これまでに1500人のアーティストが招待され、頻繁に、インスタレーションやコンサートといった作品発表が行われています。そのほかに、国外の機関との定期的な国際交流の実施や、カタログ、レコード、CDといった数多くの出版物の制作も行い、より広い範囲での芸術紹介や新たな表現分野の開拓、創造を目指しています。

主な活動

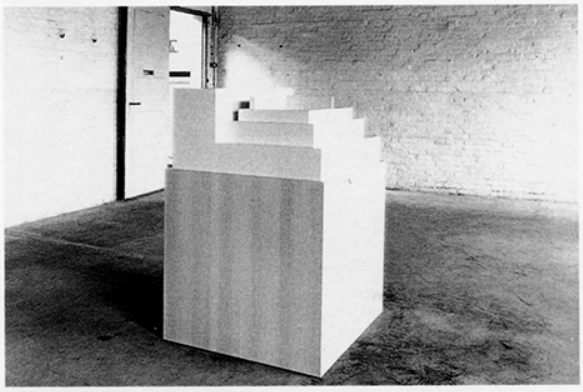
1981年 ヘルマン・デ・ヴリース（オランダ）展
1983年 ジュン・ラッタム(イギリス) 展
1984年 出口道吉・ムラカミヤスヒロ(日本)展
1984・85年「エコー・イメージ・オブ・サウンド」サウンド・アート・フェスティバル
1986年「ベルリンからのメッセージ2」（キュレーター　ロルフ・ランゲバルテス)
1988年 ジェリー・ハント(アメリカ) 展
1989年 テリー・フォックス(アメリカ) 展
1990年 保科豊巳・仁科茂・千崎千恵夫(日本)
「IKGアーティスト・オン・ビュー」グループ展
1991年 ベルナール・ビレール(ベルギー)展
1992年 ゴードン・モナハン/ローラ・キコーカ(カナダ) 展
1993年「ベルリンからのメッセージ2」（キュレーター　ミカエル・ヘルテル)
1994年 鈴木昭男 (日本) 展
1995年 ローマン・シグナー (スイス) 展
1996年 ピエール・バスティアン(フランス) 展

ヘット・アポロハウス　代表 パウル＆ヘレン・パンハウゼン
HET·APOLLOHUIS
Tongelresestraat 81 5613 DB Eindhoven The Netherlands　TEL/FAX 040 2440393

Japan-Netherlands Artists

写真撮影　ペーター・B.カールス

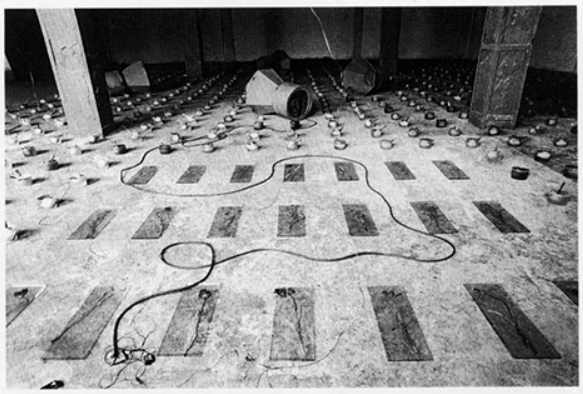
フース・クーンアラーツ Guus KOENRAADS
1949年アイントホーヘン生まれ



LES EXTREMES SE TOUCHENT

平面、立体作品を問わず、クーンアラーツの作品は幾何学的な堅牢さをその特徴としている。たとえば、単純な形態、対象性、明快な比率、意識的な色彩といったものである。しかし、彼の制作意図は、作品の静態的な提示にあるのではなく、提示する事物の形や、それに施す色彩によって、事物とそれを取り巻く空間との関係性を揺さぶろうとする点にある。古い工場の二部屋を使った昨年の作品では、一方の部屋の壁半分を黄色に、他方の部屋を青く塗り、それぞれの部屋にひとつずつ、外部を黄色と青の混色に塗った直方体の箱を配置した。二つの箱の内部の凹凸は、互いにネガとポジの構造になっていて、箱の内部には、各々、壁の色に正反するよう青と黄色が施されている。二つの箱が示す色の対称性と形の相補性は、依存しあいながらも緊張のバランスを保っているのだが、さらに、箱の内側に組み込まれたガラス板が壁の色を映し出すことによって、空間全体が作品そのものとして起ち上がってくる。この作品における構成原理が生み出すこうした眩惑は、この二つの部屋から次の部屋へと、さらに諸部屋を包含する建物全体へと、ミクロからマクロへ向けての、フラクタル的な反復再生産の可能性を秘めている。静けさに満ちたクーンアラーツの作品は、観客を《空間の彷徨者》へと強く誘う。

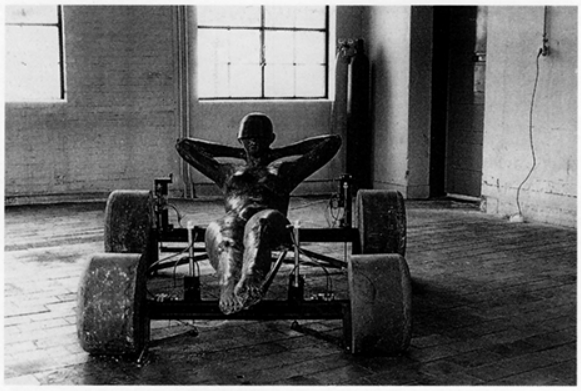
ニコ・シュルト Nico SCHULTE
1949年アーフェレースト生まれ



SPLIT DIMENSIONS/SPLIT RANDSCAPES 1995

シュルトは、テクノロジーの《電気的》な世界と生物の《自然》な世界との関係、均衡を探っている。これまで作成したものには、実物大のカメラオブスキュラ、生物ラジオ、魚や植物などを使ったドローイングマシーンなどがある。彼の創るそうしたオブジェは、空間、動静、重力、成長、偶然といった要素に彩られており、素材選択やサイズ、構成方法は展示空間の諸条件によって柔軟に決定される。昨年のインスタレーション作品『裂けた次元、裂けた風景』は、展示空間全体を中波ラジオの受信機に変容させた。これは、レモンを酢酸に漬け銅版を添えて作った無数の小型バッテリーを、床上に連結して電源とし、部屋のなかの各位置に通電性のある素材を綿密に配置して受信機の機能を持たせ、受信された多様な周波数の音が四方の巨大スピーカーから静かに流れ出るというものである。工学と自然とが奇妙に共存するこうした空間からは、科学的というよりむしろ、直感的で原体験的な印象を与えられる。シュルトの創り出す空間のなかで、観客は、無機的なテクノロジーと、どこか懐かしさを醸す植物群の両極を行き来しながら、やがてアイロニカルな詩情を感じるようになる。

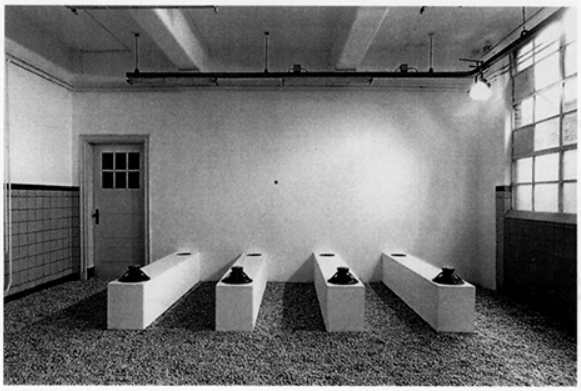
クリスチャン・ズワニッケン Christiaan ZWANIKKEN
1967年ブッスム 生まれ



THE ANIMOSITY OF THE MACHINE

ズワニッケンは、電気エネルギーや空気圧の推進力を用いた、動くオブジェによってインスタレーションを構成している。それらの外観は、ときには人間の手のようであり、またロボットのようでもあり、あるいは動物を思い起こさせることもある。大小のオブジェ各々には小型コンピュータが内蔵してあって、様々な音響を伴って動く、そうしたオブジェの動態は、プログラムによってコントロールされている。この意味では、これらの作品は機械的な範疇を越えているはずはない。しかし、作品の動きや音響から受ける印象は奇妙に曖昧で、無愛想かと思えばにこやかであったり、凶暴でグロテスクな動きを直線的に示すかと思えば、ユーモラスに緩やかに廻ったりする。実際のところ、決して無機的な印象は与えないのである。彼のインスタレーションの本質は、システム自体の明晰さと、それに反する不確定性との共存にあると言ってよい。制御による非制御状態の現出、ズワニッケンが創り出すこうした空間では、諸要素のすべてが伸びやかに自己を解放している。彼自身が《遊ぶ》部屋に足を踏み入れるとき、観客は、忘れて久しい《遊ぶ心》に魅惑される。

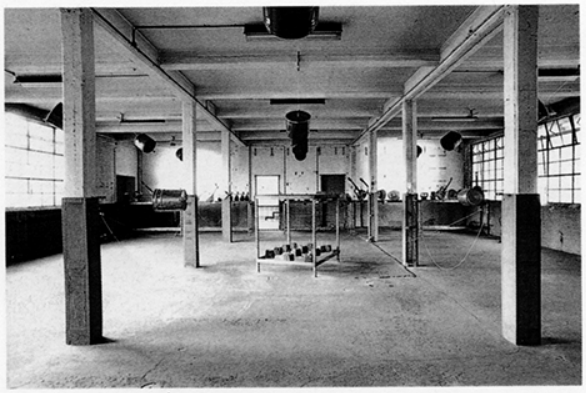
サンダー・ドゥーベッカー Sander DOERBECKER
1959年アムステルダム生まれ



AIRCO 1995

ドゥーベッカーの問題意識を明瞭に示しているのは、93年の『感慨の歌』という作品である。 修道院の天井から吊るされたバケツに水滴がランダムに落ちてくるのだが、教会建築の音響効果はその音のリズムを増幅し、調和と不調和を強調する。その傍らで、数人のパフォーマーが、各々任意に選び取った音階に対応した音声を発する。こうして不協和音が連続することになるが、ある瞬間、偶然に和音が発生し、予期せぬ調和が空間内にたち上がってくる。幾つかの単純な装置が仕掛けられた空間で、《知覚》は意識／無意識的にどのような影響を受け、どんな変化を示すか、を彼は探っているのである。その後の作品の例では、展示空間の内外の様々な音を別々に録音し、複数のサウンドボックスで再生して、展示空間の音響的恣意性と偶然のハーモニーを同時に演出したものがある。そこでは、観客自身がパフォーマーにとって代わり、空間と身体との共振を体験するとともに、やがては、見えるものと聞こえるものとの間に横たわる危機をはらんだ平衡をも感得するようになる。

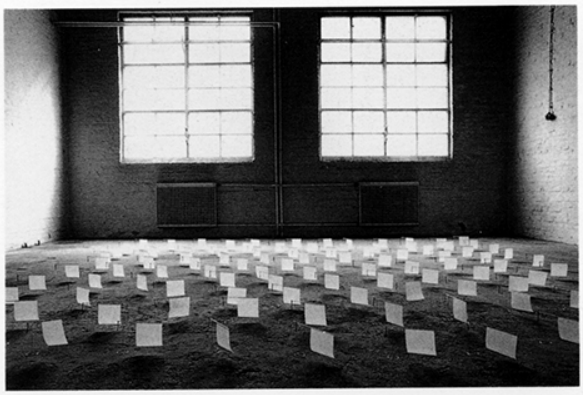
パウル・パンハウゼン Paul PANHUYSEN
1934年ボルフハーレン生まれ



500 K-G-DRAAGVERMOMEN 1995

現在のパンハウゼンの基本的な立場は、絵画、彫刻、デザインといった伝統的な区分の拒絶、あるいは、美術、建築、音楽を結んだジャンル横断的な脱構築、という点にある。長い制作履歴の後、82年から始まる『ロングストリングス』のシリーズは、展示室やその建築物の諸要素を種々の糸で連結させた作品である。空間に縦横に張り巡らされた金属やナイロンの糸は、まず、空間の建築上の意味をインスタレーションとしての造形性に変える。さらに制作者は、糸を手や弓で弾いたり、自身の声で空間を満たしたりする。こうした自らの構築物とパフォーマンスとの共在を通して、部屋や建築物全体を、視覚的、聴覚的イメージの共鳴体へと変貌させる。目的論的な意味性を剝ぎ取られた空間のなかで、作品と観客を繋ぐ、見る／聴くという一方向性も揺らぎ始める。彼の作品は、常に、その《場》に固有なものとして強く意識されており、周到な準備と計量が施されている。そうして創りあげた緻密な空間で、彼は事物の《現存在性》に絶えず立ち向かってゆく。パンハウゼンの作品のなかに、観客は、現代美術が目指すべき形而上学のひとつをはっきりと見出すことになる。

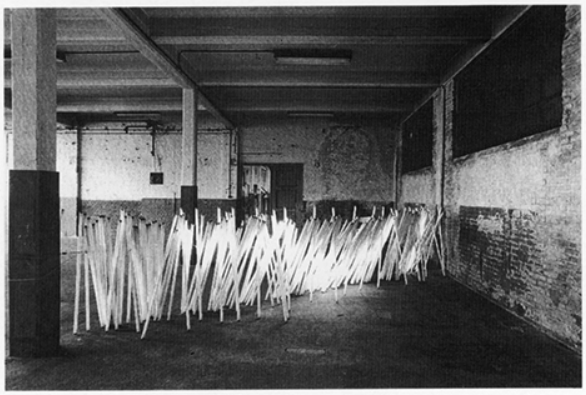
フェリックス・ヘス Felix HESS
1941年デン・ハーグ生まれ



IT'S IN THE AIR 1994-1995

蛙の合唱のなかに、秩序と混沌が共在する自然のリズミカルな音の構造を発見したヘスは、電子工学の助けを借りて、そうした状況の再現と《音》の可視化を試み始める。82年に制作した、マイクやスピーカーなどを内蔵した小型ロボット群『サウンド・クリーチャーズ』は、その成果のひとつである。この電子ロボットは、ロボット同士でお互いの音や信号に感応するだけでなく、観客の動きを含めた全体の環境の変化に応じて、音と動きを発生させる。観客はロボット群のコンサートに接すると同時に、環境の構成要因そのものとなって、ロボット群のコミュニケーションに同調することになる。これはやがて、94年の、空間に設置された大量の小さな紙の旗が、空気の微細な動きや温度変化に反応してランダムな動きを示す作品に発展していく。ここでも観客の動きは、作品の不可欠な構成要素である。音の変化と物体の動作の置換、光の変容と作品の変貌の変換といったヘスの手法は、作品環境に参画する観客をして、観客自身の存在性を強く浮かび上がらせる。

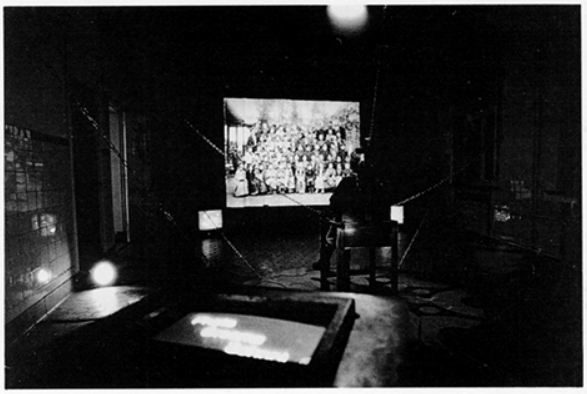
有地左右一＋笹岡　敬 ARICHI Soichi & SASAOKA Takashi
1957年大阪生まれ／1956年富山生まれ



LUMINOUS 1995 EINDHOVEN

88年に発表したシリーズ作品『WATER』で、有地左右一と笹岡敬は、部屋の中央に置いた水槽に光を照射して、水の波形の揺らぐようすを空間に投影してみせた。その後のシリーズ『LUMINOUS』では、彼らは、非制御的に点滅する多数の蛍光管を連ねて、明滅する光彩空間を創り出してゆく。この二つのシリーズの技法は異なっているが、どちらも、《水》や《光》といった非形成的な素材を採り上げ、シンプルにコントロールされたシステムによって、それらが織りなす精妙な陰影を再現しようとするものである。身体を撫で、心を慰めるような、二人が用意するこうした展示空間のなかで、観客は《誕生と消滅》の密やかなドラマに立ち会い、感覚と記憶の《戯れ》にゆったりと身を任せることになる。身体と精神が高度に物象化された現代において、奪還するのにもっとも困難な何物かを、観客はここで取り戻すのである。

小杉美穂子＋安藤泰彦 KOSUGI Mihoko & ANDO Yasuhiko
1953年京都生まれ／ 1953年京都生まれ



PENDULUM

88年からコラボレーション活動を開始した小杉美穂子と安藤泰彦は、言語テクスト、ビデオシステム、コンピューターなどの、コミュニケーションを支える諸装置を用いたインスタレーションを創り続けている。彼らによれば、コミュニケーションとは、お互いを理解する可能性を提供する機会というだけでなく、なによりも我々が自己を分析し知覚する場なのである。昨年の相互作用的な作品『ペンデュラム（振り子）』では、観客の動きに応じて、ある学校の子供達の卒業写真を、現在から過去に向かって連続的に壁に投影し、《場の歴史》を現前させるとともに《現在の不在》をくっきりと浮かび上がらせた。そこで観客が体験するのは、郷愁にも似た記憶の奪還と同時に、観客自身のアイデンティティの不確かさである。小杉と安藤の作品の多くは、様々な事物を情報レベルで再構築したもので、何らかの意味で《個と個の連鎖としての世界》をシュミレートしていると言ってよい。しかし、その作品空間が標的としているのは、観客の自己概念そのものである。作品との交感を通じて、観る者のアイデンティティは、形象化された次の瞬間に、揺らぎ始め、流動化してゆく。

佐藤 時啓 SATO Tokihiro
1957年山形生まれ

PHOTO RESPIRATION

88年から始まった写真作品のシリーズ「Breath-graph（息づく写真）」は、廃墟や工事現場跡、寂れた農村といった様々な場所を、長時間低露光で撮影したものだが、彼の作品が一般の写真と異なるのは、巨大な風景の画面のなかに、多くの光点が散在している点である。これは、作者自らが、被写体となる場所を歩き回り、鏡を使って太陽光線をカメラに向けて繰り返し反射させた行為の軌跡である。「対象を選び、それに自らの手をさしのべて、触れる」と語る佐藤のこうした《フィールド・ワーク》は、事物を正確に記録し、伝達するといった従来の写真観を根底から覆す。芸術としての写真といった公認された歴史をも遥かに越えて、佐藤が問うものは、忘れられた風景が喚起する我々の《記憶》の儚さであり、日々消し去られる《思い出》の脆さである。光学技術のある種アナログ的遡行とでも言うべき写真作品を通じて、佐藤は、瞬間と永遠を共在させ、精神が偏在する場所としての環境の《癒しの能力》を再創造する。

浜田 剛爾 HAMADA Goji
1944年青森生まれ

IMAGINARY SOCIAL FUNCTION AND ART FUNCTION
MESSAGE OF POEM-BALANCING UPON AN ETERNAL MOMENT 1995

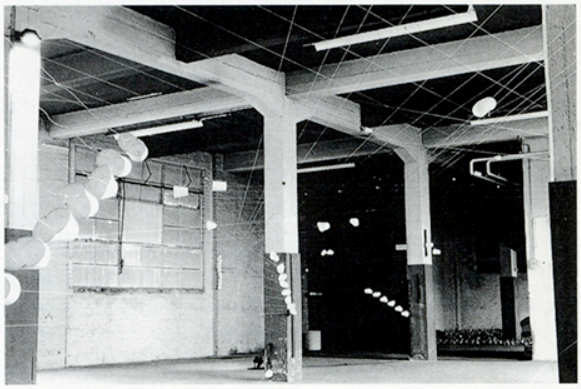
70年から81年にかけて浜田は、国内で様々なジャンルのアーティストを組織した「パフォーマンス・シリーズ」を企画実施し、パフォーマンス公演という分野の牽引的役割を果たして来た。彼自身も、72年にベルリンの壁で披露した『嘆きの壁』のパフォーマンスを出発点として、ドイツ、オーストラリア、カナダなど世界各地で公演を行っている。彼の現在のパフォーマンスの特質は、ビデオ、写真、音響機器、蜂蜜、塩、血液など多様な素材を用いたインスタレーション空間で演じられる点にあるのだが、これは、《身体を含んだミクストメディア・アート》という独自のパフォーマンス観を明晰に示している。そこでは、設定されたシステムと身体行為とが常に相互干渉を繰り返し、行為と観念とが瞬時に反転してゆく。持続する時間、存在し続ける空間といった通念は激しく揺さぶられて、《瞬間》がその相貌を現す。ウルタイ、アボリジニ等の少数民族との出会いを通じ、時間や空間の概念は文化によって決定的に異なることを経験した、と語る浜田のパフォーマンス作品は、なによりも、普遍性や永遠といった観念に対する異義申し立てと言ってよい。われわれの身体を堅く拘束している共同体原理を、徹底的に解体しようとする彼の方法は、同時にまた、スタイルとしてできあがってしまったパフォーマンスという分野の絶えざる変革を意志している。

松枝 秀晴 MATSUEDA Hideharu
1952年鹿児島生まれ

SUPPLEMENT-95

83年から始まったシリーズ『サプリメント（補遺、増補、追加）』の、最近のインスタレーションの例は次のようなものである。外光を遮断した暗い部屋のテーブル上に、幾つもの食器やグラスが整然と置かれ、その上に顔料や食塩がそれらの形に沿って蒔かれている。テーブルの脇には普通の番組やコマーシャルが流れているテレビと鏡が配置されている。きわめて日常的な空間であるが、全体をブラック・ライト（紫外線ランプ）で照射することによって、実際の色彩や質感を知覚することは不可能な仕掛けになっている。食卓空間のこうしたイリュージョナルな反転を通じて、観客は、偽装された生活の仮面を自ら脱ぎ去ることを促される。松枝が名づける『サプリメント』とは、第一には、マスメディアによる価値生成システムからこぼれ落ちた領域を意味する。しかし、そうした領域をメタファーの迷宮として再構築することによって、彼が表出しているのは、非サプリメントの正当性と普遍性に対する疑義である。この意味で『サプリメント』のシリーズは常に、サプリメントを越えようとする運動である。

水嶋 一江 MIZUSHIMA Kazue
1964年東京生まれ



STRINGRAPHY 1995

作曲家であり、サウンドアーティストでもある水嶋は、92年にスタジオ・イブを結成し、演奏者の身体表現や演奏装置のインスタレーションをも融合した新たな総合芸術としての《音楽》を創作し続けている。《音の冒険家》を自称する彼女の舞台には、たとえば、ガラス管やブリキのゴミ箱から落下する水滴が音源となるものや金属のオブジェが楽器として登場するのだが、なかでも、糸電話を応用したような、両端に紙コップを取り付けただけの糸を幾本も空間に張り巡らせた演奏システムは特筆に値する。シンプルでありながら極めて建築的なこの装置を使い、舞踏的な身体表現を伴って演奏する『ストリングラフィ』と名付けられたサウンドプロジェクトは、彼女のひとつの完成である。インスタレーションやパフォーマンスが持っている仮設性と偶然性に、そして、音楽演奏が本来持っている一回性に賭けて、多彩な音階を提示する水嶋は、いらだち、孤独、歓びといった人間の諸感情を静かに表現する。ある種演劇的空間のなかで、観客は、音楽というものの呪術的な力を再体験するのである。

ペーター・B.カールス Peter B.KAARS
1960年ベームステル生まれ
フィリップス・コンシューマー・エレクトリックス社のプロダクト・マネージャーとして勤務し、マルチメディアとデジタル・テレビの研究に携わる。1990年からアポロハウスのコンサートやパフォーマンスの写真を担当している。

NowHere

日本・オランダ現代美術交流展「NowHere」概要

オランダ展「NowHere」は、昨年10月22日から12月17日までオランダ、アイントホーヘン市で開催されました。タイトルの「NowHere」は、現代美術が生まれる Now《いま》とHere《ここ》を再び問い直そうという意図を示す造語ですが、同時に、それと相反するような、芸術の自明性を失わせる現代の状況を象徴する、Nowhere《どこにもない》という意味を含んでいます。

主催のアポロハウスがあるこの街は、別名フィリップス・タウンとも呼ばれるように、フィリップスの大きな工場を核に発展してきました。不幸にも、第二次大戦中、ドイツの空襲で街のほとんどを消失する不運に見舞われてしまいましたが、その後多くの人々の力によって、今日、近代的な都市に復興しています。

今回、スヘレンス・ファニシング・テキスタイル社の協力により会場となった旧織物工場は、街の中心のヴェストジック通り沿いにあり、すでに老朽化が進み長い間閉鎖されていたものです。この古い建物をアトリエとして、日本とオランダの12組のアーティストが、展覧会開催の二週間前からここで現地制作を開始しました。重厚な煉瓦造りの建築、内部のすすけた窓、古びた壁といったこの建物の様相は、美術館や画廊といったニュートラルな展示スペースとは異なり、歴史や文化、環境を具体的に体現しています。こうした場での制作は、作品成立の困難さゆえに、多くの試行錯誤をアーティスト自身に強いる一方で、様々な新たなインスピレーションを与えました。やがて制作期間も終わり、この古びた工場の展示室は、独創的な作品によって埋め尽くされました。幾本もの弦を空間に張り巡らせたインスタレーションとその糸を用いたパーフォーマンスで、音を発生させて視覚と聴覚の共在空間を創り出した者。アンプと植物を使った無数のバッテリーを接続して、部屋全体を大きなラジオに変貌させた者。あるいは、古びた工場の薄暗い一室に、電子光学の応用によって無数の蛍光灯が明滅する光彩空間を現出させた者など、多彩で躍動感に満ちた12の作品群による《NowHere》が実現したのです。

10月21日、展覧会開催に先立って行われたオープンニング・レセプションには、佐藤駐蘭日本大使、アイントホーヘン市長などの来賓方々や、大勢の観客が訪れました。開催当日の22日からは、展示会場とアポロハウスで、参加アーティストやこのイベントに招待されたアーティストによるコンサートやパフォーマンスが連日催され、この展覧会を一層盛り上げていました。また、オランダ美術機関訪問、シンポジウムなど様々なプログラムも並行して実施され、参加アーティストは積極的な活動を展開しました。

ポスト・モダン社会における芸術の自明性への問いかけをテーマに、異なる幾つかの領域の横断を試みた両国のアーティストの作品は、現代芸術のダイナミズムと可能性を十分に顕現させたものとして、各方面から高い評価を得ました。

「NowHere」プログラム

展覧会期　1995年10月22日～12月17日
会　　場　スヘレンス・ファニシング・テキスタイル社旧織物工場

●オープニング・レセプション
10月21日（スヘレンス）
コンサート　ベース琴／後藤真樹　パーカッション／風巻隆

●コンサート＆パフォーマンス
10月22日（スヘレンス）
水嶋一江、浜田剛爾、パウル・パンハウゼン

●サウンド・インスタレーション
10月22日（アポロハウス）
ブレース・シヴラ、ティム・ローエ、トニノ・ミアノ

●アーティスト・シンポジウム「NowHere／芸術と社会」
10月23日（アポロハウス）
［パネラー］パウル・デアリニス、エステル・フェレル、浜田剛爾、スーチャン・キノシタ、ジョン・レタム、パウル・パンハウゼン、ヘンク・フェス
［司会］キィティ・ザクルアンス

●コンサート
10月23日（アポロハウス）
パーカッション演奏／ミハエル・フォルフェルト
ギター演奏／マチュウス・アンサンブル

●パフォーマンス
10月26日（スヘレンス）　パウル・パンハウゼン

●コンサート
10月26日（アポロハウス）
自作楽器とギターによる演奏／ヴェルネル・デュラン、エリック・バルケ、シルフォア・オウーニェ　ギター演奏／デビット・ファースト

●コンサート＆インスタレーション
10月28日（スヘレンス）
サックス演奏／ギッタ・シェーフェル
パーカッション彫刻の演奏／クローディーン・デニス

［参加アーティスト］
日本／有地+笹岡、小杉+安藤、佐藤時啓、浜田剛爾、松枝秀晴、水嶋一江
オランダ／クリスチャン・ズワニッケン、サンダー・ドゥペッカー、ニコ・シュルト、フェリックス・ヘス、フース・クーン・アラーツ、パウル・パンハウゼン

［協賛・後援］　スヘレンス・ファニシング・テキスタイル社、モンドリアン基金、新ブラバンス芸術財団、フィリップス・ライティング、国際交流基金、全日空、オールスホット市第13機甲師団、SKPOアイントホーヘン

展覧会場　スヘレンス・ファニシング・テキスタイル社旧織物工場

NowHere（いま、ここ／どこにもない）

芸術家と環境とが相互に及ぼす関係は、常に理解と混乱を引き起こす。経験は感情、思考、発想、発見の道しるべとなるのだが、経験がひとたび芸術に翻訳されると、それは他の人と共有され、討論のきっかけを与えてくれるようになる。社会が生きながらえるのは、存在の質について遠慮なく論議がなされる限りにおいて、そして、生自体が芸術に表現される限りにおいてである。たとえ、生と死に関する疑問に対し我々が答えを得ることが永遠にないにしても、社会が存立するためのこうした条件はきわめて重要である。社会と環境における変化は、やがて、芸術の形式上の条件と芸術の内容に、さらには表現手段に影響を与える。

社会と人々の個人生活にふりかかる出来事は、人々の知覚、思考、感覚、意見を変えてゆく。芸術家が自分自身に課す掟を除いては、芸術には如何なる掟もない。芸術家は自由であり、望む限りのどんな表現手段を選んでもよいのである。

社会と芸術家の間には何の契約も存在しない。芸術家は賞賛という報酬を受け取る。「社会の中のたんなる職業ではない、という芸術家の地位を確立するために、芸術家は、必需品ではなくともあらゆる要素を含んでいるという芸術家の性質を顕揚しなければならない。芸術家は、観衆が自ら満ち足りる状態を顕揚し、あらゆるものが芸術に成り得て、誰もが芸術を創り得ることを顕揚しなければならない。」ジョージ・マチュウナスのこの明白な言明を、私はこれまでずっと支持してきた。

芸術の世界は、幾多の作品の広範な分布によって特徴づけられている。それらの作品は、忘れられた芸術家によって、あるいは著名な芸術家によって芸術として提示されたものであり、一握りのエリートによって、あるいは社会一般によって芸術として受け入れられたものである。末永く遺る芸術もあれば、消えていく芸術もある。芸術は、記憶の中に永遠に止まり、印象を与えるのに僅かに寄与し、そして、辛うじて人々の注意をひき、気軽に忘れ去られる。芸術は人々、機械、動物、自然によって創られる。見出された事物、または似姿は、芸術作品であり得る。芸術家にとって必要であることのすべては、芸術を芸術たらしめる何物かに狙いを定めることであり、少数であれ、多数であれ、その何物かに心動かされる観衆の存在である。そして、見よ、新たな芸術作品が生まれ、感情、思考、発想が社会に送り込まれるのだ。そうした諸々の要素は、当の芸術家の独創的な感覚や発想に一致している必要はない。

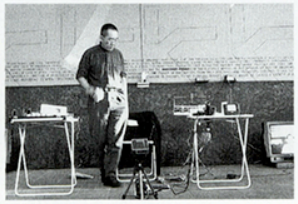
自分自身を芸術の専門家と見做している人々がいる。何が芸術で、何が芸術でないかを決定し、芸術の批評基準を規定することが、自身の務めであると彼らは感じているのである。こういった人々は、芸術に感動する機会を自ら奪っている。感じ、考えたことは何であれ表現する、という芸術家の自由の中にこそ芸術の神髄が深く宿っていることを、彼らは理解していない。さらに、芸術作品を受け入れ、消し去り、無視するという公衆の自由も、芸術家の自由と同様に、芸術の必須の条件である。

それゆえ、芸術と公衆との間に自分たちの権威を及ぼそうと望んでいるどんな専門家の意図に対しても、疑いの眼差しを向けねばならない。そうした専門家は愚鈍であり、芸術の外部の利益に奉仕しているのだ。

真正な芸術は、権力ゲームの上に展開されるものではなく、市場価値の再現のために、また、専門家の権威を高めるために創られるものでもない。それは、文化的な形式でもなく、政治的あるいは国家的な宣伝手段でもない。芸術は、テクノロジーや伝統的メディアによる認知、あるいは芸術家自身による評価を果てしなく追い求めたりはしない。いま述べたようなつまらない目的を底に秘めて作られ、芸術として紹介されるあらゆるものが、芸術の社会的な意義が知覚されることに否定的な影響を与える。本物の芸術とは、各自の好みに応じた放送局を選びだせる感度の良いラジオのようなもので、感情、思考、発想の様々なチャンネルに人々は周波数を合わせることができるのだ。芸術の動かざる価値は、我々がここで何をしているのかを、絶えず問題とする点にあり、そうして、生命に対する我々の情熱を養い、我々の存在理由を問いかける点にある。こうした過程は、人間の生でなく動物の生にも起こる、と考えても許されるだろう。

パウル・パンハウゼン　1995年7月

パウル・パンハウゼン
インスタレーション&パフォーマンス

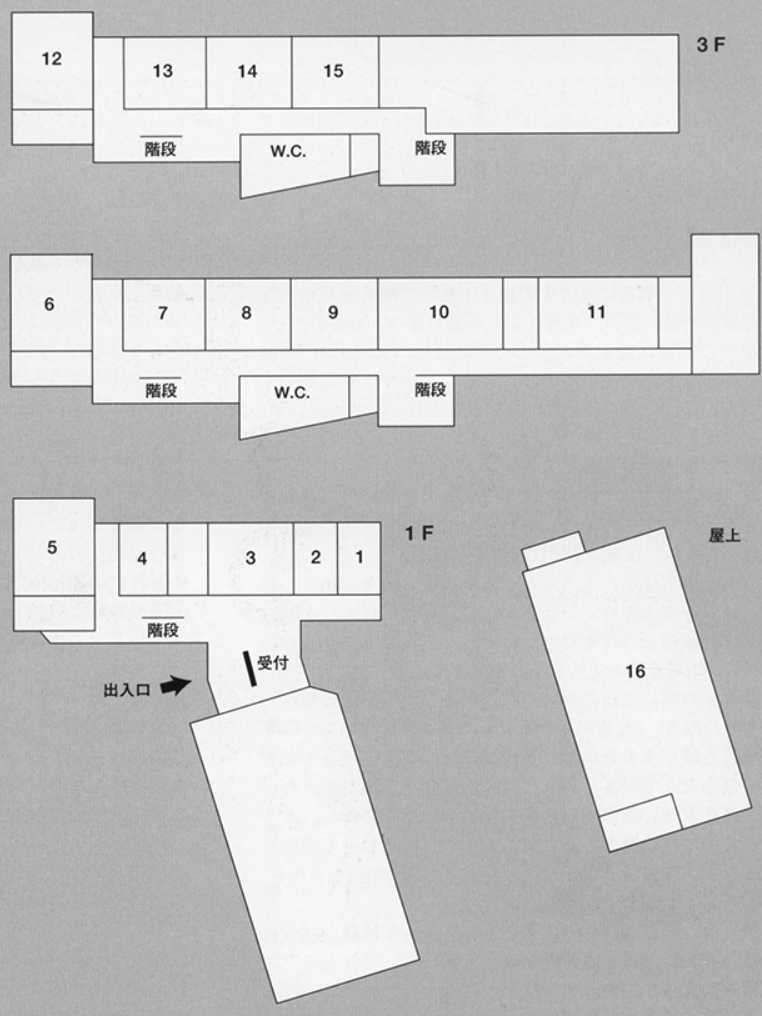


水嶋一江　ストリングラフィ
浜田剛爾　パフォーマンス

フェリックス・ヘス　制作風景
松枝秀晴　制作風景

佐藤時啓　制作風景
シンポジウムNowHere／芸術と社会

1 休憩室
2 ペーター・B.カールス写真展
3 小杉美穂子 + 安藤泰彦
4 ヘット・アポロハウス資料展
5 クリスチャン・ズワニッケン
6 パウル・パンハウゼン
7 サンダー・ドゥーベッカー
8 ニコ・シュルト
9 松枝秀晴
10 フース・クーンアラーツ
11 浜田剛爾
12 水嶋一江
13 佐藤時啓
14 フェリックス・ヘス
15 有地左右一 + 笹岡敬
16 パウル・パンハウゼン
クリストフ・シャルル



●協賛 SUPPOORT

TOYOTA

ANA All Nippon Airways

TEPCO

Hoct

有限会社水留造園

RECRUIT

●助成 SUBVENTION

国際交流基金
花王文化財団
ユニオン造形文化財団

●協力 COOPERATION

TOPPAN TOPPAN PRINTING CO.,LTD.

TOA

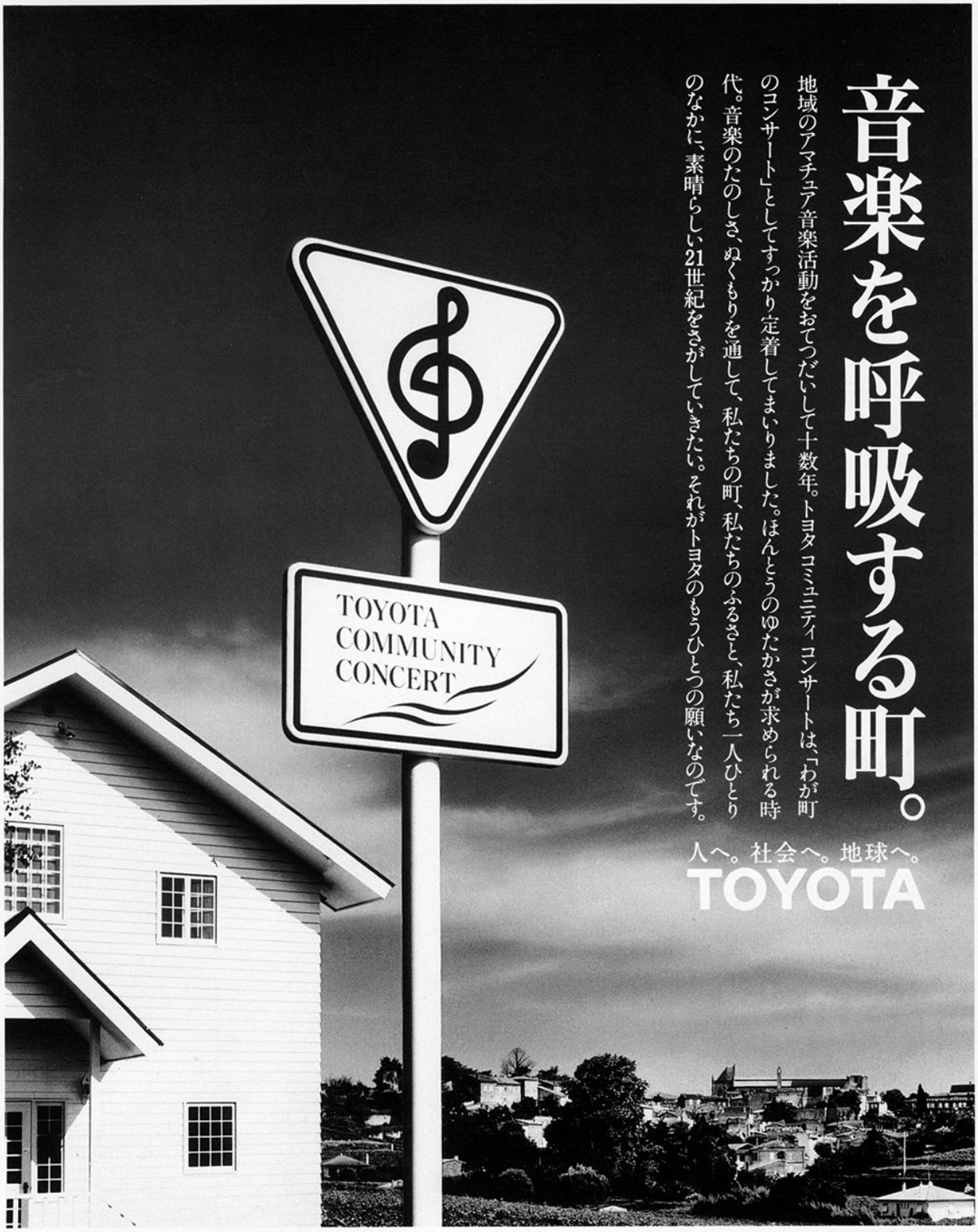
MITSUBISHI

株式会社 マスカガミ

Heineken Beer

根の回復として用意された12の環境
日本・オランダ現代美術交流展1995-1996 港区政50周年記念事業

会場設営 松野 浩 八百板力 藤川幸治 鶴谷恵三
写真撮影 長谷川毅雄
ビデオ撮影 金 應敏
スタッフ 北山理子 本多路子 箭内新一 吉武利枝
編集制作 ギャラリー・サージ 渡辺千恵子 上坂和代
協力 天野豊久 小川亮彦
印刷 凸版印刷株式会社
〒101 東京都千代田区神田和泉町一番地
TEL 03-3835-5111
発行 ICAEE 国際現代美術交流展実行委員会
ギャラリー・サージ
〒101 東京都千代田区岩本町2-7-13 渡辺ビル1F
TEL 03-3861-2581 FAX 03-3861-2582



音楽を呼吸する町。

地域のアマチュア音楽活動をおてつだいして十数年。トヨタ コミュニティ コンサートは、「わが町のコンサート」としてすっかり定着してまいりました。ほんとうのゆたかさが求められる時代。音楽のたのしさ、ぬくもりを通して、私たちの町、私たちのふるさと、私たち一人ひとりのなかに、素晴らしい21世紀をさがしていきたい。それがトヨタのもうひとつの願いなのです。

人へ。社会へ。地球へ。
TOYOTA

主催／ICAEE国際現代美術交流展実行委員会　共催／港区、港区国際交流協会
後援／駐日オランダ大使館、日蘭学会、朝日新聞社、TBS
赤坂一ツ木通り商店街振興組合、赤坂みすじ通り会、商店街振興組合 エスプラナードアカサカ、赤坂福榎商店会
協賛／トヨタ自動車株式会社、全日空、有限会社北斗開発、東京電力株式会社、有限会社水留造園、株式会社リクルート
助成／国際交流基金、花王文化財団、ユニオン造形文化財団
協力／ 凸版印刷株式会社、TOA株式会社、三菱電機株式会社、株式会社マスカガミ、ハイネケン・ジャパン株式会社

M (社)企業メセナ協議会認定